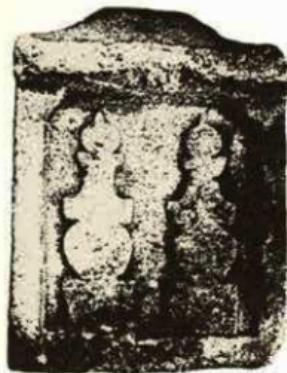


高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要

— 吉武城遺跡 —



1987

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一・つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに一般国道161号（高島バイパス）建設に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3日

滋賀県教育委員会

教育長 鮎田志農夫

例　　言

1. 本書は建設省の実施する一般国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡新旭町所在古武城遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和61年度に発掘調査し、当年度に整理したものである。
2. 本調査は建設省滋賀国道工事事務所長からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、新旭町教育委員会の多大な協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長　服部　正	課長補佐	田口守一郎
埋蔵文化財係長　林　博通	埋蔵文化財係主任技師	用田政晴
管理係主任主事　山本徳樹		

財団法人 滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄	事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋	調査二係長	大橋信弥
		調査二係技師	大崎哲人
総務課長	山下　弘	総務課主任主事	松本暢弘

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者の技師大崎哲人と、一部（第3章　3. 遺物の木製品の観察文）を森　正が担当して行った。なお、出土した漆器等の木製品の取り扱いについては滋賀県埋蔵文化財センター技師中川正人（保存科学）の指導・協力を得た。

7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序 文

例 言

第 1 章 遺跡の位置と環境	1
第 2 章 調査経過	5
第 3 章 調査結果	7
1. 層位	
2. 遺構	
3. 遺物	
4. 小結	
第 4 章 ま と め	22

図版目次

図版 1 造構

- (上) 調査前状況(南より)
- (下) 調査前状況(東より)

図版 2 造構

- (上) 吉武城伝承地現状(西より)
- (下) 五十川城遺景(調査地より)

図版 3 造構

- (上) 表土除去状況
- (下) 作業状況(SKO1の掘り込み)

図版 4 造構

- (上) E-1~3区 全景(南より)
- (下) 1~5区 全景(南より)

図版 5 造構

- (上) W-1~3区 全景(南より)
- (下) 6~10区 全景(北より)

図版 6 造構

- (上) 6~10区 全景(南より)
- (下) E-1~3区 SD01(北より)

図版 7 造構

- (上) W-6・7区 SD01・SD15(北より)
- (下) W-3区 SKO1(北より)

図版 8 造構

- (上) E-10区 SD13(東より)
- (下) E-7区 SD14(東より)

図版 9 造構

- (上) E-9区 SB01(南より)
- (下) E-9区 SB01(西より)

図版10 遺構

- (上) W-7区 塗状施設(北より)
(下) W-7区 塗状施設近景(北より)

図版11 遺構

- (上) E-3区 SDO1遺物出土状況
(下) E-1区 SDO1遺物出土状況

図版12 遺構

- (上) E-2区 SDO1遺物出土状況
(下) E-5区 SDO4遺物出土状況

図版13 遺構

- (上) W-7区 SDO9遺物出土状況
(下) W-8区 SD12遺物出土状況

図版14 遺構

- (上) E-10区 SD13遺物出土状況
(下) 埋め戻し完了状況(南より)

図版15 遺物 上器(1)

図版16 遺物 土器(2)

図版17 遺物 土器(3)

図版18 遺物 土器(4)

図版19 遺物 土器(5)

図版20 遺物 上器(6)

図版21 遺物 木製品

図版22 遺構全体図(1)

図版23 遺構全体図(2)

図版24 遺物実測図(1) SDO1

図版25 遺物実測図(2) SDO1

図版26 遺物実測図(3) SDO1

図版27 遺物実測図(4) SDO1

図版28 遺物実測図(5) SDO1・O4

- 図版29 遺物実測図(6) S D 0 5
- 図版30 遺物実測図(7) S D 0 8・1 3
- 図版31 遺物実測図(8) S D 1 2・1 3・1 4
- 図版32 遺物実測図(9) S D 1 3・1 4・1 5、S K 0 1・0 2
- 図版33 遺物実測図(10) S K 0 4、茶褐色粘質疊土(W-8~9区)、木製品
- 図版34 遺物実測図(11) 木製品

挿 図 日 次

第1図 周辺遺跡分布図.....	2
第2図 吉武城遺跡トレンチ配置図.....	5
第3図 S D 0 1 遺物出土状況図(E-2区).....	8
第4図 S D 0 1・0 2・0 6 埋土堆積状況図.....	9
第5図 S D 0 8・1 3・S K 0 1 埋土堆積状況図.....	10
第6図 挖立柱建物(S B 0 1)検出状況図.....	12
第7図 壁状施設検出状況図.....	13

第1章 遺跡の位置と環境

吉武城遺跡は、滋賀県高島郡新旭町大字旭小字城ノ下に所在する。新旭町は、高島平野の南部平野北半部、安曇川北岸に位置し、斐庭野台地などの海拔200~300mの丘陵・台地部と、安曇川の沖積作用により形成された円弧状の扇状地性三角州上の平野部からなっている。平野部は、全体的に砂礫質平野であり、河川が網目状に流路をとっている。調査地は、平野部である円弧状の扇状地性三角州の北端部付近、田井川の右岸に位置する。田井川は、斐庭野台地東縁麓部の安曇川の埋め残し部分を東流しており、その周辺部は泥質な湿地帯を形成している。^①吉武城遺跡も、地下水位の高い湿润地に立地しており、調査区東側の吉武城伝承地周辺は現在も草の生える状態にある。

吉武城遺跡の周辺には、琵琶湖岸から500m前後内陸に入った地点に立地する幾つかの連続した遺跡からなる針江遺跡群がある。海拔およそ85mラインに立地する針江遺跡群は、南から針江南遺跡、深溝条里遺跡、針江中遺跡、針江北遺跡、針江川北遺跡、旭遺跡、そして今回調査を行った吉武城遺跡などの一連の遺跡から成っている。この針江遺跡群については、古くは1958年に上貞二により、おそらく現在の針江川北遺跡の範囲内の東南部より出土した弥生土器の資料提示という形で紹介されている。^②その後国道161号線高島バイパスの建設工事に伴っての、分布調査^③、試掘調査^④、試験調査^⑤、そして本調査として実施された発掘調査^⑥や、圃場整備事業に伴っての幾地点かにおける発掘調査^⑦が行われたことにより、その成果をうけて徐々に遺跡の性格が明らかにされつつある。

針江遺跡群は、遺物は弥生時代前期のものから出土している^⑧が、遺構としては弥生時代中期にまで遡って確認されている。針江北遺跡において、両岸を杭板および横板で護岸した溝状遺構が検出されており、水田の用水路的役割が想定されている^⑨。また、針江南遺跡においても、弥生時代中期の溝状遺構や旧河道が確認されており、この時期には水稻耕作に適した低湿地であるこの遺跡周辺部が、水田耕作地としての開発が行われたことを示している。その後、弥生時代後期に至って遺跡としての広がりを見せ、遺物量も増加する。生活遺構も明確に検出されるようになり、針江北遺跡、



第1図 周辺道路分布図

針江川北遺跡においては、大溝に囲繞された、棟持柱建物や掘立柱建物を含む住居群と、大溝外側に木構築が確認されており、線的ではあるが弥生時代後期の当地域における集落景観を復元することが出来る。⁹

弥生時代中期に始まったこの針江遺跡群周辺部の開発は、弥生時代後期から古墳時代初頭に至って安定した集落を成立させたが、その後一時的に集落の廃絶があるようである。古墳時代前期以降において、再びこの地域に開発がおこなわれ、集落が形成されるのは、平安時代前期まで待たねばならない。¹⁰針江南遺跡や針江遺跡群の南西に位置する正伝寺南遺跡においては、平安時代から鎌倉時代にかけて生活遺構が検出されている。また、吉武城遺跡に隣接する針江川北遺跡においては、近世初期（安土桃山時代～江戸時代初期）の区画溝などが検出されており、¹¹吉武城遺跡との連続性を有しているようである。

以上のように、吉武城遺跡をも含めた針江遺跡群は、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての時期に中心をおき、その後平安時代から江戸時代初期頃まで断続的に遺構が存続する複合遺跡である。出土した弥生時代中期から古墳時代にかけての土器群は、各種遺構または上器層において時間的な差異を持つつ、かつ各々がまとまった状況を呈しており、この地域の土器の変遷についての研究を進めていく上で極めて良好な資料であるといえる。また、針江遺跡群は地下水位の高い低湿地に位置すると言う立地条件も手伝って本製品の遺存状況が良好であり、土器資料とも併せて、今後の本報告における整理・研究が期待される。

針江遺跡群の東方、琵琶湖岸ぞいには、森浜遺跡、¹²針江浜遺跡、深溝浜遺跡などがある。浜汀と湖中の浅瀬において遺物散布地が見られ、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺物の出土が知られている。最近行われた針江浜遺跡の潜水試掘調査、（1986年実施）において、湖底の埋没林と弥生時代前期の遺物包含層が確認された。埋没林は、その後C¹⁴放射性炭素による年代鑑定により、縄文時代晩期にあたる年代が与えられており、琵琶湖の湖岸線の動向と集落の推移を知る上で貴重な資料であるといえる。¹³

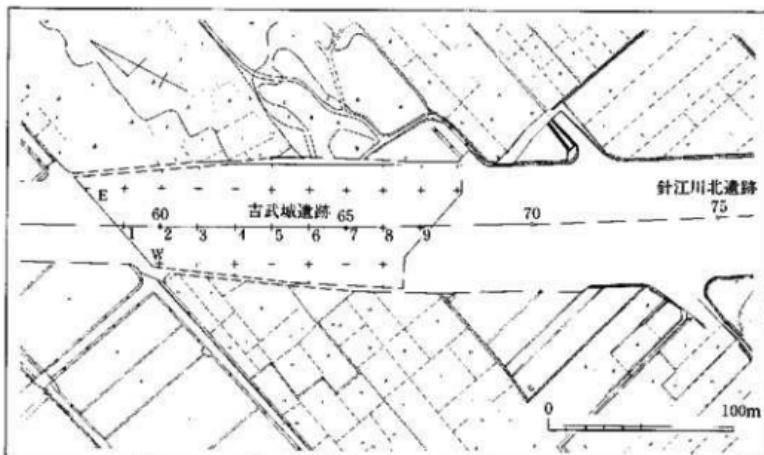
針江遺跡群に営まれた集落が、古墳時代初頭以降一時的に廃絶することは先に述べたが、その廃絶期を埋める時期の集落が営まれる動向を知ることが出来るのが、針江遺跡群の南西方向に位置する堀川遺跡である。海拔90mラインの扇状地性三角州上の

中でもやや安定した旧河道の自然堤防かと思われる微高地に立地する。堀川遺跡は、
国鉄湖西線新旭駅の建設に伴っての発掘調査や、その後の駅周辺部の開発に伴っての
発掘調査⁶により、その性格を知ることが出来る。遺構の中心は、平安時代の掘立柱建
物群にあるようであり、周辺部の条里と関連付けての評価が成されている。遺物は弥
生時代後期のものから出土しているが、遺構としては古墳時代後期の竪穴式住居跡が
検出されており、この時期に至ってこの地域に集落が営まれるようになったことを示
している。ここに古代における安曇川左岸の扇状地性三角州上においての、琵琶湖湖
岸ベリから内陸部へという集落立地の推移をみることができる。

第2章 調査の経過

本年度の調査地域は、昨年度に調査を完了した針江川北遺跡に宅地造成地を隔てて隣接する。国道161号線高島バイパスの建設計画に伴っての遺跡分布調査により、濠で囲まれた吉武城遺跡が確認されており、その後の試掘調査においては、吉武城遺跡に直接関係する中・近世の遺構は確認されなかったものの、方形周溝墓の溝の可能性のある落ち込みや柱痕、遺物包含層が把握されている地域にあたる。また、今回の調査地域内においては、本調査に先行して昭和56年度に試験調査として行われた旭遺跡の調査地区も含んでいる。この試験調査においては、鋸欠板によって調査区を開んでの調査方法が採られ、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器や木製品等の遺物を包含する自然流路が検出されている。

本調査は、これらの試掘調査と試験調査、そして昨年度までの発掘調査の成果をうけて行った。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺物の出土と遺構の存在、針江川北遺跡の第2区において検出された吉武城に関連すると思われる近世初頭の遺構に連続する諸遺構の存在が予想され、針江遺跡群の遺構の広がりを確認することと、吉



第2図 古城跡トレンチ配置図

武城関係の遺構とその性格を明らかにすることなどが、調査前の課題として挙げられた。

調査範囲は、試験調査において遺構・遺物包含層の認められたNo.91～No.99トレンチを含めた、建設省施設の道路敷センターライン上で全長約160mの範囲とし、トレンチを設定した。道路敷センター杭のNo.60～No.65ラインを基準として調査区全体の方眼割り付けを行い、遺構等の検出状況の実測や遺物の取り上げは全てその地区割りにしたがった。

調査は便宜上、調査区をその中央付近で二分割して北側から行い、北半部の調査完了後に堆土を反転し、南半部の調査を行った。トレンチの両側に排水溝を掘削した後、重機により表土除去を行い、その後人力によって調査を進行した。現地における発掘調査は、後述する幾つかの成果を得て昭和61年12月28日をもって終了した。整理調査は、発掘調査に併行しつつ昭和62年3月25日まで実施し、出土遺物の一部分ではあるが本概要報告書に掲載したごくの成果を得た。

第3章 調査結果

1. 層位

調査区は、地盤の柔らかい湿地帯で、かつては水田として利用されていた。地表面はおよそ海拔85.6m前後で、水田面間に高低差のあまり見られない平坦地であった。

第一層は、表土層であり、かつての耕作土である。厚さは15~30cmである。第二層は、灰色斑混黄色粘質土層で、かつての床土と思われる。厚さは25~30cmである。第三層以下は、調査区の北半部と南半部で、堆積状況が異なる。

北半部の第三層は、黒茶褐色粘質土層で、厚さ10~15cm。遺物包含層である。第四層は、暗灰色砂質土層で、厚さ20~25cm。この層の上面において遺構が検出された。第五層以下は、70~80cmの厚さで、腐植物を含む青灰色、灰褐色、暗青灰色等の砂層が重なり合って堆積しており、その下は灰褐色の砂礫層に至る。第五層以下は、遺物、遺構とも確認されなかった。

南半部の第三層は、茶褐色混疊粘質土層で、厚さ10cm前後。遺物包含層である。第四層は、5~10cm大の亜角礫の堆積した青灰色砂礫層である。この層の上面で遺構が検出され、第四層より下層では、遺物、遺構とも確認されなかった。尚、第三層と第四層の間に、部分的に灰色粘質土層の堆積があり、遺構面を形成している。

南半部の堆積は、このように疊層が安定した状況を呈しており、この低湿地の中においては比較的水はけの良い微高地を形成していたようである。この疊層は、調査区内において北西方向に向けて下がっており、その上面に砂層を厚く堆積させている。

2. 遺構

検出した主な遺構は、溝、上坑、掘立柱建物、櫛、壇状施設である。これらは全て同一の遺構面において検出された。以下、各々の遺構の概要を列記する。

(1) 溝

S D O 1 (E-1区~W-6区) 幅約2.5~3.0m、4区においては約6.0m、深さ0.2~0.5m。埋土は大きく分けて二層からなり、上層はスクモ混じりの暗茶褐色粘質土、下層は同じくスクモ混じりの青灰色系の砂質土、粘質土が堆積する。基底部のレ

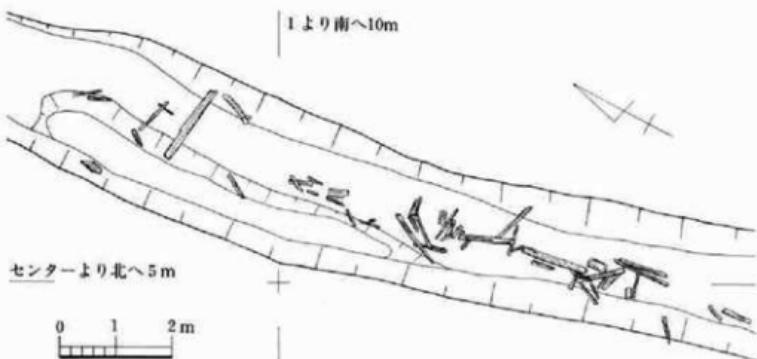
ベルは、北端部が南端部より約0.3mほど下がっており、周辺の地形も北に向けて下がる。弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器（以下、古式土師器とする）、木製品を多量に含む。緩やかに北流する自然流路である。この溝は、旭遺跡において検出された溝に連続するもので、沼沢地に近い流れのよどんだ自然流路と推定されている。

SD02 (1~2区) 幅約1.3m、深さ約0.3m。一定した深さと幅でV字状に掘り込まれ、基底部のレベルは北に向けて下がり、SD01に合流する。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土、下層に灰褐色系の砂質土が堆積し、数次にわたる水流の変化が観察される。SD01の手前でほぼ直角に流れを変えていることや、掘り方の形状より、人工的に掘削されたものと考えられる。

SD03 (E-2~3区) 幅約0.8m、深さ約0.25m。一定した幅と深さでU字状に掘り込まれ、SD01に合流する。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土、下層に灰褐色系の粘質土が堆積する。SD01のSD03合流地点のやや下流側において、多くの砂の堆積が見られSD03から水の流れ込んだ形跡が見られる。

SD04 (E-5~6区) 幅約7.0m、深さ約0.5m。両端部が途絶えており、溝の基底部が残存したものと思われる。埋土は、上層に灰色系の粘質土、下層に茶褐色粘質土が堆積する。下層は古式土師器や木製品を含む。

SD05 (W-8~9区) 幅約7.0m、深さ約0.8m。溝幅内で流水の変化による平坦面がある。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土、中層に暗茶灰色粘質土、下層にスクモ混じりの灰色砂礫土が堆積する。中層には流木を多く包含し、それを挟んで上下層と



第3図 SD01 遺物出土状況図 (E-2区)

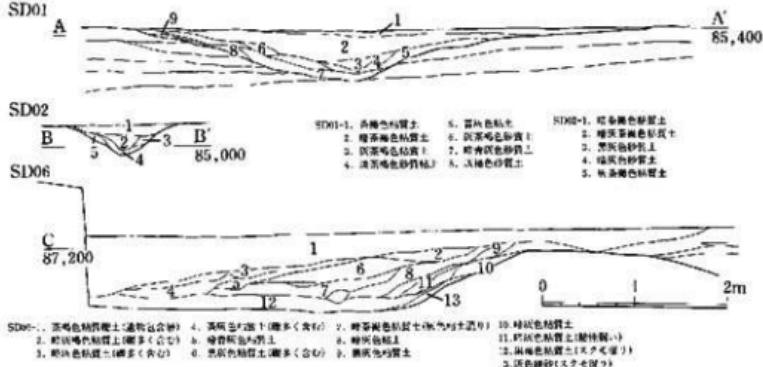
も多量の古式土師器を包含する。北端はSD07に切られる。SD13との関係は明らかに出来なかった。

SD06 (W-8~9区) 幅約4.0m、深さ約0.8m。SD05と馬の背状の疊層（地山）を隔てて位置し、SD05の範囲で捉えることも出来る。埋土は、上層に茶褐色粘質土、下層に灰茶褐色系の粘質土が数次にわたって堆積する。上層は、多量の古式土師器と共に近世初期の遺物を包含し、上方が堅く締まっていることなどから、SD07の掘削前後に削平、整地されたものと考えられる。下層は古式土師器のみ包含する。SD07により切られる。

SD07 (W-8区) 幅約8.5m、深さ約0.5m、N-22°-E。北隅の8m四方の掘り込みは深さ約0.7m。溝壁はほぼ垂直で、人工的な掘り込みである。埋土は、一時期に埋め戻されたように灰黒褐色粘質土上が一様に堆積する。ただし、基底部にはスクモ混じりの茶褐色粘質砂層が堆積する。埋土に多量の古式土師器と近世の遺物を包含する。区画機能を持った濠と考えられる。

SD08 (W-6~9区) 幅約4.0m、深さ約0.4m、N-112°-E。直線的にSD14にし、基底部のレベルよりSD14への水の流れが想定される。埋土の状況から水量の変化や、溝をさらえたような状況が観察される。古式土師器と共に近世の遺物を多く出土する。SD14への合流手前において、後述する環状施設が検出されている。

SD09 (W-7~8区) 幅約0.3~0.9m、深さ約0.1m。北端は削平を受けて途



第4図 SD01・02・06 墓上堆積状況図

絶える。埋土は、茶褐色砂質土で古式土師器と木製品を包含する。SD10、07に切られる。

SD10 (W-8区) 幅約0.6m、深さ約0.5m。SD07に平行する。

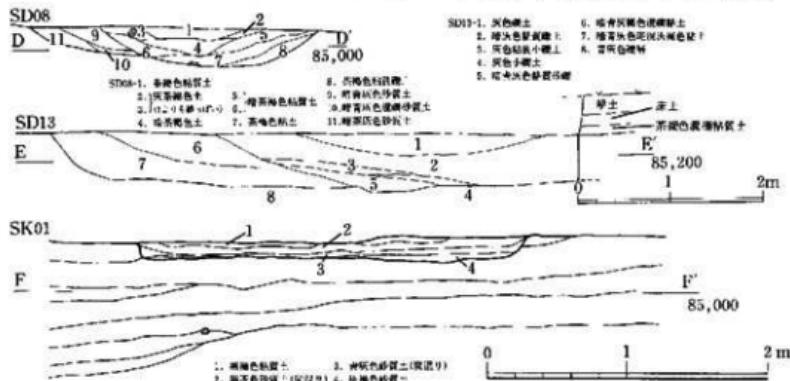
SD11 (W-7区) 幅約1.5m、深さ約0.2m。埋土は、古式土師器を包含する茶褐色粘質土と、その下に薄く灰褐色細砂層が堆積する。SD14、07に切られる。

SD12 (W-7区) 北端部で幅約1.3m、深さ約0.2m、南端部で幅約3.5m、深さ約0.5m。埋土は、上層にスクモ混じりの茶褐色粘質土、下層に青灰色細砂質土が堆積し、多量の古式土師器を包含する。SD11、12は、SD06と同様に、上面に暗灰褐色粘質礫土が堆積する。

SD13 (9~10区) 幅約7.0m以上、深さ約0.6m、N-112°-E。溝の西端部は明瞭に検出できなかった。溝壁はほぼ垂直に掘り込まれており、西半部は壁に添って約1.5m、深さ約0.2mの堀切がなされている。中央部の落ち込みから、漆器や箸などの近世の遺物を出土する。落ち込みのそばには丸木による棒が作られており、減水時の何らかの施設であったと思われる。埋土は、粘性の高い礫土が数次にわたって堆積する。流れのあまり無い濠であったと考えられる。

SD14 (6~7区) 幅約12.5m、深さ約0.5m、N-22°-E。東南隅に5m四方の掘り込みがある。埋土は、暗灰褐色粘質土で、近世の遺物や焦痕のある小型板碑、五輪塔などを包含する。

SD15 (W-6区) 幅約3.5m、深さ約0.2m。埋土は、暗灰褐色砂層で、若干の



第5図 SD08・13・SK01埋堆積状況図

古式土師器を包含する。

S D 1 6 (E - 8 区) 幅約1.3m、深さ約0.2m、N - 109° - E。三ヶ所の掘り残し部を持ちつつ直線的に延びる。溝壁はほぼ垂直に掘り込まれ、埋土はやや粘質の暗灰褐色礫土が単層で入る。

S D 1 7 (E - 8 区) 幅約0.6m、深さ約0.2m、N - 109° - E。溝壁や埋土の状況は S D 1 6 に似る。

(2) 土坑

S K 0 1 (W - 3 区) 長辺約3.7m、短辺約3.0m、深さ約0.1m、長方形。溝壁はほぼ垂直に立ち上がり、基底部は平坦である。埋土は、炭を含む黒灰色砂質土と青灰色砂質土が堆積し、古式土師器を包含する。

S K 0 2 (W - 3 区) 長辺約4.0m 以上、短辺約4.0m、深さ約0.1m。埋土の状況は S K 0 1 に似ており、古式土師器をやまとまって出土した。

S K 0 3 (W - 9 区) 径約1.7m、深さ約0.3m、円形。溝壁はほぼ垂直で、駁ぞいは中央部よりも約0.1m ほど深い。

S K 0 4 (E - 9 区) 深さ約0.2m、不定形。埋土は灰茶褐色礫土で、近世の遺物を含む。

S K 0 5 (E - 9 区) 謎丸三角形で、舟底状の土坑である。埋土は、炭混じりの灰茶褐色土である。

S K 0 6, 0 7 (E - 9 区) 深さ約0.2m、不定形。

S K 0 9 (E - 9 区) 径約1.3m、深さ約0.2m、円形。溝壁はほぼ垂直に掘り込む。

S K 1 0, 1 1 (E - 8 ~ 9 区) 深さ約0.3m、不定形。

S K 1 2 (E - 8 区) 長辺約1.8m、短辺約1.2m、深さ約0.3m、長方形。溝壁はほぼ垂直に掘り込む。

S K 1 3 (E - 8 区) 径約1.4m、深さ約0.1m、円形。

S K 1 4, 1 5 (E - 8 区) S K 1 4 は径約1.1m、S K 1 5 は径約0.9m、深さ約0.1m、円形。

S K 1 6 (E - 7 区) 深さ約0.4m、不定形。二段の掘り込みを持ち、埋土は茶褐色粘質土上で古式土師器を包含する。

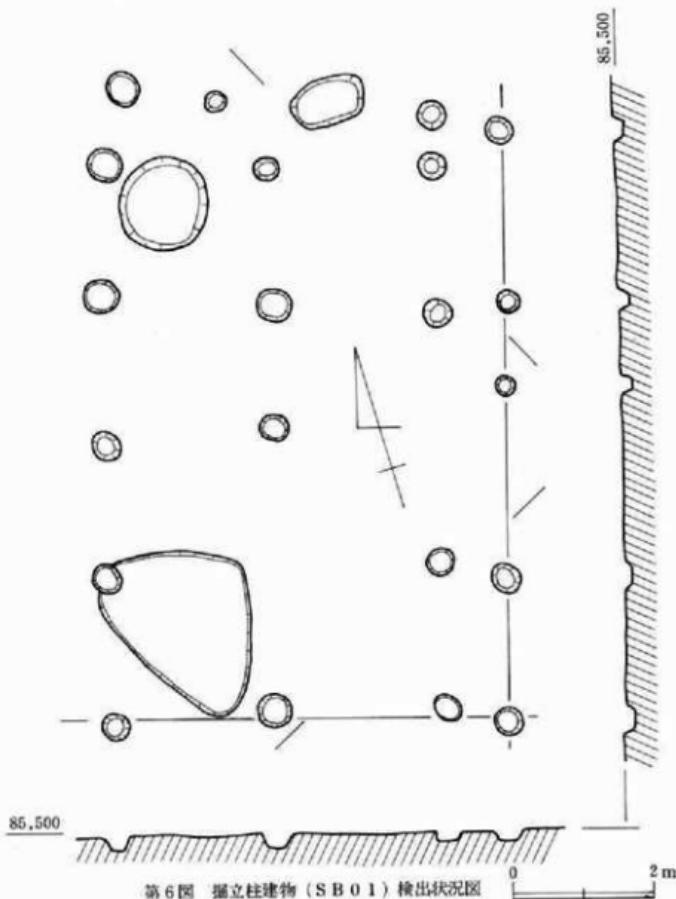
S K 1 7 (W - 6 区) 深さ約0.4m、不定形。近世の遺物を出土する。

SK18 (W-6区) 長径約4.6m、橢円形。舟底状の掘り込みで、古式土師器を出土する。

(3) 挖立柱建物

SBO1 (E-9区) 東西2間(約4.2m)×南北4間(約8.0m)、N-15°-E。
北側と東側に庇を有する。

SBO2 (E-9区) 東西2間(約3.8m)×南北2間(約3.8m)、N-21°-E。



第6図 挖立柱建物(SBO1)検出状況図

S B 0 3 (E-3~4区) 東西2間(約3.8m)×南北2間以上(約4.2m), N-26°-E。

(4) 檻

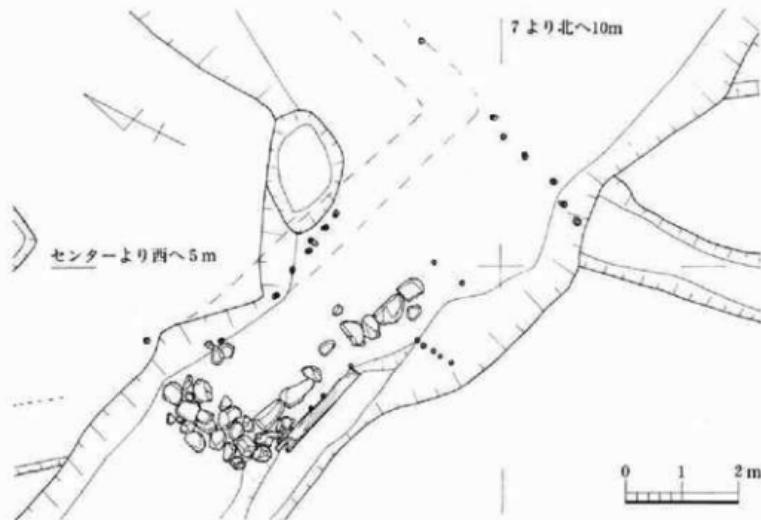
S A 0 1 (E-8区) 間隔約3.3m、全長約6.4m、N-121°-E。

S A 0 2 (W-6区) 全長約5.0m、N-127°-E。

S A 0 3 (E-3区) 全長約5.3m、N-30°-E

(5) 堰状施設(W-7区)

S D 0 8 の S D 1 4 に合流する地点に杭列が流れに直交する形で打ち込まれ、上流側にさらに2条、溝に添って北岸と南岸にも杭列が検出された。南岸においては長さ約2.0mの角材が杭列に添って据えられている。また、約0.5m大の石材が杭列の内側と、溝を二列で横切る形でならんで検出された。S D 1 4 合流地点の杭列は、濠の水量を調節するための堰としての機能を、溝を横切る石列は溝を渡る飛び石としての機能を想定することが出来る。この施設は、約0.2~0.5m大の石塊が多量に投げ込まれたようにして雑然と入っていた。石塊に混じって近世の遺物も多く出土した。



第7図 堰状施設検出状況図

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物収納用コンテナに約100箱分の上器類と、多数の木製品、漆器、石製品などである。年代的には、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての時期と、近世初期の二時期に大別できる。以下、現段階において整理し得た範囲内ではあるが、遺構別にその概要を述べる。

(1) SD01 出土遺物全体量の半数以上の量の土器、木製品を出土した。土器は主に3区以南から出土しており、1区以北への遺物量の増加は予想されない。木製品は徐々に數的には減少しつつ1区まで出土が認められた。(図版24~28)

壺 1と2は二重口縁をもつ。1は、外反して聞く口縁部に粘土帯を垂下させ、波状文を施した後に棒状浮文を貼り付ける。頸部には刻みを施した貼付突帯を付す。2は、二段に外反して聞く口縁を持ち、頸部に刻みを施す。肩部は横描きの波状文等で飾る。3は、外反して広がる口縁部を持ち、端部は丸くおさめる。口縁外面にタタキの痕跡が残る。肩部以下はミガキを施す。4は、大きく聞く脚台を持ち、口縁部はやや内湾気味に聞く。口縁部と体部外面にはミガキを施す。5は、球形の体部に「く」字形に屈曲する頸部をもつ。口縁端部は内側に丸く肥厚する。

壺 6~9は、「く」字形に屈曲する頸部を持ち、口縁端部を内側に肥厚させる。6は折り返しが明瞭であり内傾する面を持ち、7~9は肥厚が僅かで丸く終わる端部をもつ。口縁部外面をヨコナア、体部外面をハケメ、体部内面をケズリにより仕上げる。10は、複合口縁を持ち、口縁屈曲部の外面に鋭い棱をなす。口縁端部は内側に肥厚する。体部内面はケズリにより仕上げる。11、12は、端部を丸くおさめる単純口縁をもつ。口縁内面を粗いハケメ、体部内面をケズリにより仕上げる。13、14は、体部の内外面ともハケメを施す。13はやや綾長の体部で尖り底をもつ。15は、「く」字形に屈曲して直線的に聞く口縁部をもち、端部に外傾する面をもつ。16は、15よりもやや外反気味に聞く口縁部をもち、端部は摘み出したように外傾する面をもつ。17は、受口状口縁をもち、体部外面にヘラ描きの波状文と粗い直線文を施し、内面はケズリにより仕上げる。18は、「く」字形に屈曲する口縁部と肩の張った体部、そして脚台をもつ。肩部外面は横方向、体部下半は縦方向のハケメ、体部内面はケズリにより仕上げる。19は、大きく外反して聞く複合口縁をもち、7条の擬凹線を巡らす。体部外面を粗いハケメ、内面をケズリにより仕上げる。20は、円孔を穿った半底の底部である。

鉢 21は、「く」字形に屈曲して伸びる短い口縁をもつ。底部は平底である。22は、僅かに屈曲して開く口縁をもつ。内外面ともミガキを施す。

小型丸底壺 23~25は、口径が体部最大径より大きく、頸部は器高の1/2に等しいか上方の位置にある。やや内弯気味に長く伸びる口縁部をもち、体部下半はケズリの後ナデで仕上げる。26~28は、口径が体部最大径より小さいか等しく、頸部は器高の1/2より上方の位置にある。体部外面にハケメを施し、28は間隔の粗いミガキが数条入る。29は短い外開きの口縁部をもち、体部外面はハケメで仕上げる。腹部に円孔を穿つ。

高杯 30、31は、杯部が楕形で、脚部は緩やかに広がる。31は脚部に線刻で残存部において2系統の施文を施す。32~34は、杯部が屈曲して直線的に広がり、脚部は柱状部から屈曲して広がる。脚部内面には布目痕を残す。柱状部は縦方向に面取りを施した後にミガキで仕上げる。

器台 35は、受部が二段に屈曲し、端部に内傾する面をもつ。受部と脚部は貫通し、脚部は緩やかに広がり、円孔を三方に穿つ。36は、受部端部に立ち上がりをもち、脚部は直線的に大きく開く。37は、浅い皿形の受部をもち、端部は丸くおさめる。脚部は高く、緩やかに開く。

小型土器 38~42は、楕形の小型品で、ナデにより成形する。38は外面をハケメ調整した後にナデで仕上げる。43~45は、高杯形の小型品である。43は杯部内面と脚部内外面にハケメを施す。45は脚部外面に縦方向のミガキを施す。

木製品 1は、膝柄櫛である。現存長53.8cm、柄部幅17.8cmを計る。柄部の先端部分は、くびれた後やや丸く削り出している。別木による柄を装着するものと思われる。肩部は、いわゆる「ナスピ形」を呈しており、刃部は、先端に向かって徐々に幅を増している。刃部の最大部幅は7.6cmを計る。刃部の先端部は、摩滅、欠損している。材質は広葉樹と思われる。2は、石包丁形木製品である。基部は欠損しており、全形は不明である。側辺の片面を削り、やや鋭い刃部を削り出している。表面は、使用によるためか平滑に仕上がっている。現存長12.3cm、刃部長7.5cm、厚さ0.5~0.7cmを計る。材質は広葉樹と思われる。3は、田下駄である。全長35.8cm、幅16.2cmを計る。表面は、平滑に削っている。裏側には幅約7cmの凸帯を削り出すが、かなり磨耗している。方形の透かし孔を6箇所に穿っている。材質は広葉樹と思われる。

(2) S D 0 4 (図版28)

壺 46は、口縁部は屈曲して直線的に外に開き、下方に挿み出し外に面をもつ端部を有する。頸部外面に細かなハケメを施す。47は、大きく外へ開く口縁部で、端部を拡張して斜交の刻みで飾る。48は、「く」字形に屈曲した口縁部が口状を呈する短頸壺である。平底で体部外面に粗いハケメを施す。

壺 49は、内弯気味の口縁部で、端部はやや肥厚して外に開いておわる。体部外面はハケメ、内面はケズリで仕上げる。50は、ほぼ直立する口縁部をもち、擬凹線を施す。端部は強く横ナギして尖り気味に丸くおさめる。

小型丸底壺 51は、大きく直線的に開く口縁部をもち、口径が体部最大径より大きい。横方向の細かいミガキを施し精良品である。

高杯 52は、橢形の杯部をもち、脚部は直線的に開く。53は、緩やかに広がる脚部であり、杯底部に凹板充填が観察される。

器台 54は、緩やかに広がる脚部であり、円孔を三方に穿つ。

小型土器 55は、壺形の小型品で、口縁部を上方に挿み出し、平底の底部をもつ。

木製品 4は、広歎である。全長28.4cm、頭部幅12.1cm、刃部最大部幅17.8cmを計る。着柄部でくびれる、巾広の刃部を持つ。刃部の先端部は、摩滅、破損している。頭部には、長さ11.6cm、厚さ3.5cmの舟形突起を削り出しており、直徑3.3cmの着柄孔を穿つ。着柄角度は、約70°である。材質は広葉樹と思われる。5は、膝柄股歎である。基部の先端部を削り、細くとがらせている。刃部は二股に削り出し、先端部ほど薄くなる。ほぼ全面にわたって焼けており、炭化している。材質は広葉樹と思われる。

(3) S D 0 5 (図版29)

壺 56は、複合口縁をなし、口縁部は斜め上方に直線的に伸びる。内外面ともハケメを施す。57は、外弯して広がる口縁部をもち、端部に面をもつ。体部外面をハケメ、内面をケズリで仕上げる。

壺 58は、「く」字形に屈曲して直線的に伸びる口縁部をもち、端部を内側に肥厚させる。体部外面にハケメ、内面にケズリを施す。60は、外開きの単純口縁をもち、卵形の体部で底部はケズリにより尖る。体部上半は横方向、下半は縱方向のハケメを施す。内面はハケメの後、下半部を上方に削り上げる。61は、端部に外傾する面をもつ口縁部を有し、体部外面にタタキ、内面にケズリを施す。

鉢 62は、底部に円孔を穿つ有孔体である。体部外面上半をケズリ、内面をハケメ後ナデで仕上げ、口縁端部は摘み上げている。

高杯 63は、楕形の杯部に外開きの脚部が取り付く。杯部と脚部外面にミガキを施し、外面に赤色の顔料を塗布している。64は、直線的に広がる脚部であり、杯底部は円板充填が観察される。

木製品 61は、ヨコヅチである。全長17.7cm、敲打部長9.4cm、柄部長8.3cmを計る。敲打部断面は、ややいびつな直径約19cmの円形を呈する。柄部は細く、端部に凸帯を削り出している。材質は芯持ちの針葉樹である。

(4) SD 0 8 (図版30)

土師皿 65は、平坦な底部に直線的に聞く口縁部をもつ。端部に内傾する面をもつ。

天目碗 66は、口径12.2cmを計り、口縁端部は外反して丸くおさめる。

擂鉢 67は、5条単位のカキメを施す。胎土に、石英や長石を粗く含む。

その他 底部に「振」(?)の字を記す漆器碗、漆器皿、古錢「祥符元宝」を出土する。

(5) SD 0 9 (図版34)

木製品 8は、広歎の未製品である。長さ25.8cm、最大部幅33.7cmを計る。側辺は粗く削っており、平面台形を呈する。中央部に舟形突起を削り出しているが、着柄孔は穿たれておらず、着柄部となる部分も欠損している。表面には、幅1~2cmの削り痕の単位が観察される。材質は広葉樹と思われる。

(6) SD 1 2 (図版31)

甌 68、69は、「く」字形に屈曲して内弯気味に伸びる口縁部をもち、端部を内側に肥厚させる。69は肥厚部に面をもつ。体部外面はハケメ、内面はケズリを施す。70、71は、複合口縁をもち、口縁屈曲部の外面に稜をなす。口縁端部は上方に面をもつ。体部外面をハケメ、内面をケズリにより仕上げる。72は、「く」字形に屈曲して直線的に短く伸びる口縁部をもち、端部に外傾する面をもつ。口縁部内外面と体部外面にハケメを施し、小さな平底をもつ。73は、外に広がる口縁部をもち、端部は指押さえにより成形する。74は、受口状口縁をもち、受部などの屈曲は明瞭な棱をもたない。体部外面はハケメの後ケズリのような調整を施して仕上げる。

鉢 75は、口縁部を外反させる。口縁部内外面にハケメ体部外面にミガキを施す。76は、浅鉢形で、外傾する口縁部が内弯気味に伸びる。外面に煤が付着している。

高杯 77は、ほぼ直線的に開く脚部で、厚い器壁をもつ。円孔を穿ち、外面に縦方向のミガキを施す。78は、緩やかに広がる脚部で、外面縁部に横方向、上半部に縦方向のミガキを施す。

器台 79は、皿形の受部をもち、端部は外反する立ち上がりを有する。脚部は直線的に開き、円孔を穿つ。外面は面取りの後、横方向にミガキを施す。

土師皿 80は口径 9.2cm、81は口径 8.2cmを計り内面に煤が付着する。

木製品 9は、膝柄股鍼である。現存長42.2cm、頭部長17.0cm、刃部長25.2cmを計る。頭部の先端は欠損しているが、刃部に向かって幅を増していき、いわゆる「ナスピ形」の肩部をもつ。刃部は二股に削り、先端に向かって徐々に厚さを減じている。材質は広葉樹と思われる。

(7) SD 1 3 (図版31・32)

灰釉小皿 82は、口径10.1cm、淡緑色灰釉を施し、底部内面に印花をもつ。

擂鉢 84は、8～10条単位のカキメを施し、底部に使用による磨耗が見られる。

木製品 10は、鋤である。柄部幅 4.0cm、長さ13.3cmを計り、巾広のスコップ形の身部を持つものと思われる。身部の欠損面は、焼け焦げている。表面に、鋭利な刃によるものと思われる傷が多数残っている。材質は針葉樹と思われる。

その他 三點の漆器椀、箸などを出土する。

(8) SD 1 4 (図版31・32)

天目碗 85は、口径12.0cm、器高 6.7cmで、高台内部は丸いヘラグリを施す。86は、口径11.8cmで、破損部を補修している。口縁端部は外反して丸くおさめる。

擂鉢 88は、口縁部に段をもち、9条単位のカキメを施す。使用により磨耗する。

その他 焦痕のある五輪塔、頭部を四柱の家形につくる花崗岩製の双五輪塔板碑（表紙）が出土している。

(9) SD 1 5 (図版32)

壺 89は、外に屈曲した口縁部をもち、端部を上方に立ち上げて外側に沈線をもつ面を有する。体部外面はハケメの後ミガキで仕上げる。

(10) SK 0 1 (図版32)

小型土器 90は、楕形の小型品で、手づくねで成形される。胎土は精良である。

(11) SK 0 2 (図版32)

壺 91は、内弯気味に聞く口縁部をもち体部外面にハケメの後、縱方向のミガキを施す。

壺 92は、屈曲して直立する口縁部に擬凹線を施す。体部外面をハケメ、内面をケズリで仕上げる。

鉢 93は、単純口縁をもち、端部は丸くおさめる。体部内外面にハケメを施す。94は、肩の張った体部をもち、平底の底部に円孔を穿つ。

高杯 95は、直線的に聞く脚部で、円孔を三方に穿つ。外面はハケメの後に弱いミガキを施す。

器台 96は、浅い椀形の受部をもち、脚部は緩やかに広がり、三方に円孔を穿つ。

(12) SK 04 (図版33)

灰釉小皿 97は、低い断面三角形の高台をもち、淡緑色灰釉を施す。

天目碗 98は、口径12.7cmを計り、口縁端部は外反して丸くおさめる。

染付碗 99は、底部から緩やかに立ち上がる器壁をもち、高台端部は丸くおさめる。高台部と底部内面に二重の圓線がめぐる。

(13) その他 W-8~9区のSD 05、SD 06の上面の擾乱層(茶褐色粘質礫土)より、溝に伴っていたと思われる古式土師器と、近世の遺物を出土している。

壺 100は、「く」字形に屈曲して伸びる口縁部をもち、端部は内側に肥厚する。体部内面のケズリは上半と下半で方向が異なる。

高杯 101は、弱く屈曲して聞く脚部で、外面に丁寧な縱方向のミガキを施す。

器台 102は、大きく聞く脚部で、器壁は薄く、外面に精緻なミガキを施す。

土師皿 103~105は、いずれも口径9cm程度を計る。103、104は、内外面に煤まりの付着物がみられる。

天目碗 106は、口径12.2cmを計り、口縁端部は外反して丸くおさめる。褐色不透明釉を施す。

木製品 7は、小型の下駄形の木製品である。現存長9.3cm、幅6.4cm、厚さ2.0cmを計る。裏面は、角を削り断面台形を呈しており、幅1.1cmの溝を掘る。方形と円形の透かし孔を2箇所ずつ穿っている。用途は明確でない。材質は広葉樹と思われる。11は、杓子である。現存長24.5cm、柄部長11.0cm、杓部長13.5cm、杓部幅7.2cmを計る。柄部断面は隅切り長方形であり、杓部断面は、両側から削りレンズ状を呈する。

内部端は若干欠損している。

3. 小 結

本調査において検出した遺構、遺物についての分析は、今後の整理調査により検討されていく所であるが、ここでは小結として、現段階における範囲内での調査結果を述べる。

まず検出した遺構の年代観であるが、遺構に伴って出土した遺物より、およそ古墳時代前期のものと、近世初期（16世紀後半）の二時期に大別される。この二時期の遺構は同一遺構面において検出され、また近世初期の遺構は古墳時代前期の遺構を切っており、埋土上に古式土師器を多量に包含する状況にある。遺構の年代はそのことを加味して決定していく必要がある。

遺物の出土状況より、古墳時代前期の遺構とされるものは、SD01～06、09、11、12、15、SK01、02、16、18である。このうち、SD01、05、11、12は、若干埋土の堆積状況が異なり今後更に検討する必要があるが、おそらく、同じ溝であると思われる。これらの遺構から出土している古式土師器は布留式土器にその中心を置いている。最も多くの遺物を出土したSD01では、須恵器を含まないこと、小型丸底壺が、口径が体部最大径より小さいか等しく、頸部が器高の1/2より上方にあり、精緻なミガキが見られない様相を呈することなどから、布留式の中でも新しい段階に入った時期のものと思われ、奈良県上ノ井手遺跡井戸SE030下層の状況に相当するものと考えている。このSD01は遺物を上下二層に分けて取り上げており、今後細かに検討していく必要がある。SD05、06、11、12も、ほぼ同じ状況を呈している。SD04は、これとは若干異なった様相を呈している。高杯に、柱状部から屈曲して外に広がる脚を持つものが無く、小型丸底壺は、大きく直線的に聞く口縁部をもち、精良品である。SD01よりも古い段階を考えている。

一方、近世初期の遺構とされるものは、SD07、08、13、14、SK04、17、SB01、塙状施設である。これらは、16世紀後半の時期を比定することの出来る遺物を出土している。そして、これらの遺構と同一方向、もしくは関連性を持つ位置するものとして、SD10、16、17、SK03、05～15、SB02、03、SA01、03があり、近世初期の遺構と考えられる。

次に、遺構の在り方であるが、古墳時代前期の遺構の中心は、多量の遺物を出土した溝にあると言える。そのうちSD02と03を除いては自然流路と考えられる。これらの自然流路は、礫層と砂層の境に沿う形で流れている。遺物の出土量は北にいくに連れて減少し、調査区の北端部においては流されやすい木製品が数点出土しており、緩やかに北流するものと思われる。遺跡の広がりとしては、南から延びてきた針江遺跡群の北端部の様相を呈しており、北への広がりは予想されない。西へは、吉武城遺跡に隣接する旭遺跡が存在し、SD02の在り方からも広がりが予想される。

近世初期の遺構の在り方は、低湿地の中でも安定した礫面を選んで、区画性を持って整然と配置された建物などが検出された。[X]溝を伴う建物を、濠が囲繞する様相を呈している。昨年度に調査された針江川北遺跡第2[X]において検出された、近世初頭の遺構に連続するものと思われる。遺構の広がりとしては、東の吉武城伝承地の方に向へと延びる様相を呈している。昨年度の成果も含めて、この地域には16世紀後半に区画性を持った生活空間が營まれたようである。なお、これらの遺構から出土する遺物には、それはどの時間的な幅が見られないことを指摘することが出来る。

第4章 ま　と　め

本概要報告書の最後に、現段階で得られている成果と、今後の課題を挙げてまとめとしたい。

まず、古墳時代前期については、出土した古式土師器をめぐる幾つかの点について述べる。先述したように、今回検出した遺構の年代は、布留式でも新段階に入った頃を与えることが出来るものであった。しかし、出土した遺物の中には、庄内式段階のものも少なからず含んでいた。溝からの出土遺物であるための問題は残すが、土器片に摩滅があまり見られず、良好な遺存状態を示していること、埋土の堆積と遺物の出土状況などから、土器相に見られる型式的な時間幅を、遺構の存続や堆積の時間幅にあてはめることは妥当性を欠く。また、後世の搅乱による混入も考えられない。このようなことから、むしろ庄内式から布留式という型的には時間幅をもった土器群が、同時性をもって共存したと考えるほうが妥当であろう。

そのように捉えた場合、その共存関係に見られる幾つかの特徴を指摘することが出来る。器種別に観察すると、庄内式などの古相の型式が伝統的とも言うべく残つてくる割合が高い器種と、古相を呈する土器の割合が低い器種があるようである。

壺においては、装飾性を依然有しており、棹状浮文や波状文、ヘラ描き文などで飾る土器が多い。高杯では、脚部の形状が柱状部をもち屈曲して聞く無孔のもののはかに、緩やかに広がり円孔を三方に穿ったものが半数以上の割合を占めるようである。

一方、甌においては、体部外面にタタキを施し、口縁部を摘み上げるなどの古相を呈するものは数点の破片のみで、受口状口縁を持つものの全体の中で占める割合も低い。小型丸底甌においても、布留式の中で確実に粗質、簡素化の傾向を辿っているようである。

このような新陳代謝の動向が器種ごとに大きく異なる傾向が、果たして湖西北部でみられる地域色なのかどうかは、今後の検討を要するところである。また、SD01、05、12などにおいては、遺物を上下二層に分けて取り上げており、そこに時間差が見い出せるならば、今後の整理調査の中でさらに微視的に分析していく余地があるといえる。

次に、周辺遺跡において出土している、布留式併行期とされている古墳時代前期の土器群の中での、今回の上器群の位置付けを考えてみる。この時期の上器をまとめて出土している新旭町内の例としては、正伝寺南遺跡昭和57年度調査分のSD1、針江川北遺跡第2区のSX1がある。いずれも概要報告書の範囲内での見解であり、将来、本報告が出る段階でさらに検討をすべきであるので、ここでは予察として対比しておく。正伝寺南遺跡の例は、小型丸底壺が、大きく開く口縁部をもち、頸部が器高の1/2より下に位置するなど、本遺跡例よりも古相を呈するようである。針江川北遺跡の例では、高杯は、柱状部をもち屈曲して開く無孔の脚部を持つものが多く、小型丸底壺は、口径が体部最大径より小さく、直立気味の口縁部を持つなど、本遺跡例よりもやや新相を呈するようである。

また、新旭町の南に位置する安磐川町の南市東遺跡においては、初期須恵器を伴出する古式七師器の例を見ることが出来る。SD0802は須恵器出現以降の土器群を出土しており、5世紀後半から6世紀初頭という年代が調査者により与えられている。飾られた壺ではなく、小型丸底壺はほぼ直立する口縁部をもち、ミガキを全く施さない。高杯は柱状部から屈曲して大きく低く開く脚部を持つものが主流を占める。壺は、口縁端部を丸くおさめる單純口縁で、内側への肥厚は見られない。このような土器相は、本遺跡例よりも明らかに新しいものといえる。本遺跡においては、須恵器の出土を全く見なかつた。しかし特筆すべきは、SD01において出土した肩部に円孔を穿った小型壺(29)の存在である。須恵器の器形を意識したものであり、須恵器の出現から遠からぬ時期をそこに想定することが出来る。すなわち、本遺跡のSD01を中心とした土器群は、須恵器の集落内での普及直前期の様相を呈していると考えられる。以上、予察として本遺跡出土の古式土師器の位置付けを試みた。この予察の検証は、湖西北部地域における土器編年を確立していく中で行っていくべき課題としたい。また、この地域における搬入品と在地品の在り方追及し、その中でこの地域の地域色を明らかにしていくことも今後の課題としたい。

最後に、区画性をもった近世の遺構群について検討する。この遺構群が16世紀後半のあまり時間幅の無い生活空間である様相を呈していることは先に述べた。今回の調査区の東側には、隣接して吉武城伝承地があり、本遺跡も吉武城の一画を占める位置にある。吉武城は、斐庭丘陵の東麓の小高い山の上に立地する五十川城の城主吉武忠

岐守の出城と伝えられている。この吉武氏については、不明な点も多いが、およそ延暦寺の山門領である木津庄の庄官としてこの地を支配したものと考えられている。吉武城周辺の記録としては、定林坊田畠帳に天正二年(1574年)には吉武村として住民一十余名の名が記されており、法泉寺伝においては天正十一年(1582年)の秋、織田信長の兵乱により落城し、城主は家来と共に逃れ、その後の行方は知れないと記されている。針江川北遺跡第2区のSD2からは、家屋焼失後、濠内に廃棄されたと思われる焦痕のある礎石が出土しており、今回の調査においても、焦痕のある小型板碑、五輪塔などがSD14に廃棄されたようにして出土し、埴状施設もその機能を停止するがごとく多量の石塊が投げ込まれた状態で検出された。このような発掘調査による成果と、伝承される吉武城の落城、廃絶を結びつけて考えることも可能かもしれない。今後慎重に検討していきたい。

（註）

1. 水山高幸・池田頼・大橋達「琵琶湖周辺の地形」（『琵琶湖国定公園学術調査報告書』滋賀県 1971年）
2. 三上貞二「滋賀県新旭町針江弥生式遺跡について」（『史想』第9号 紫郊史学会 1958年）
3. 福岡澄男他「国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書」（滋賀県教育委員会 1971年）
 4. 1. 国司高志・兼康保明「針江遺跡群試掘調査概要——高島郡新旭町針江所在——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981年）
 2. 兼康保明他「正伝寺南遺跡・新庄城遺跡試掘調査概要——高島郡新旭町所在——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1982年）
 5. 兼康保明・宮崎幹也「針江遺跡群丸山遺跡発掘調査概要——高島郡新旭町所在——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1982年）
6. 1. 兼康保明他「新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要——高島郡新旭町所在——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1983年）
 2. 吉谷芳幸・清水尚他「高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要——新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江南遺跡——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1984年）
 3. 清水尚・尾崎好則・吉谷芳幸「高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要——正伝寺南遺跡・針江南遺跡・針江北遺跡——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985年）
 4. 清水尚他「高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要——針江川北遺跡——」（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986年）

- 7-1. 国司高志・神谷友和「高島郡新旭町針江遺跡」(『は場整備関係道路発掘調査報告書』第1号 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980年)
2. 国司高志「高島郡新旭町針江遺跡」(『は場整備関係道路発掘調査報告書』第3号 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1981年)
8. 註6-2と同じ
9. 註6-3と同じ
10. 註6-4と同じ
11. 註6-1と同じ
12. 註6-4と同じ
- 13-1. 遠藤保明「よみがえる湖西の古代——水没した森浜遺跡を追って」(『湖国と文化』第3号 滋賀県文化体育振興事業団 1978年)
2. 遠藤保明「森浜遺跡(新川舟溜り航路部分)発掘調査報告書 高島郡新旭町針江地先湖中所在——」(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1979年)
14. 滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査係主任技師大沼芳幸氏の御教示による。
15. 山崎秀二・中村博司他『滋賀県文化財調査報告書 第5号』(滋賀県教育委員会 1975年)
16. 1. 「新旭町堀川遺跡 第2次発掘調査略報」(新旭町教育委員会 1976年)
2. 「新旭町堀川遺跡 第3次発掘調査略報」(新旭町教育委員会 1977年)
3. 水口・折井千枝子「新旭町堀川遺跡 第4次発掘調査略報」(新旭町教育委員会 1978年)
4. 国司高志「新旭町堀川遺跡 第5次発掘調査略報」(新旭町教育委員会 1979年)
17. 註6-4と同じ
18. 註3と同じ
19. 註4-1と同じ
20. 註5と同じ
21. 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60号第2巻 1975年)
22. 中江彰・南市東遺跡発掘調査紙報』(安佐川町教育委員会 1979年)

図 版



調査前状況（南より）



調査前状況（東より）



吉武城伝承地現状（西より）



五十川城遠景（調査地より）



表土除去状況



作業状況（SKO1の掘り込み）



E-1~3区 全景（南より）



1~5区 全景（南より）



W-1~3区 全景（南より）



6~10区 全景（北より）



6～10区 全景（南より）

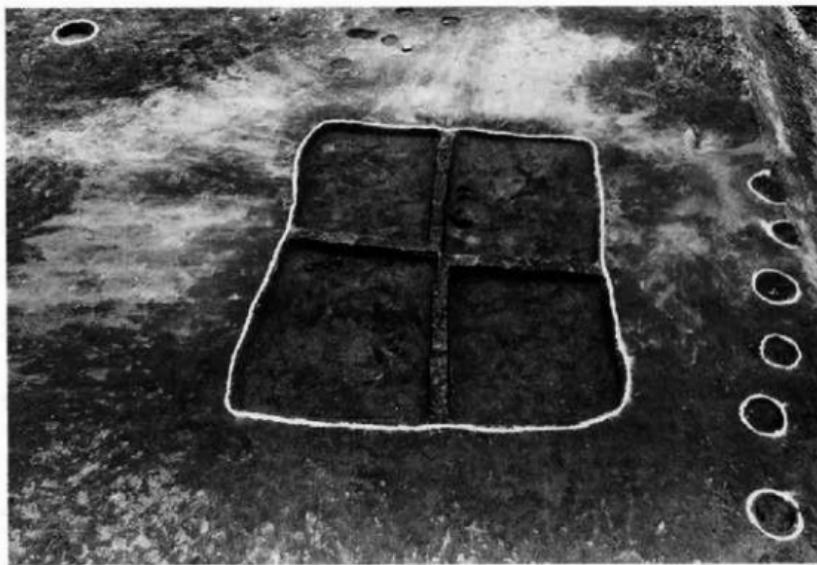


E-1～3区 S D 01 (北より)

図版七 遺構



W-6・7区 SD01・SD15 (北より)



W-3区 SK01 (北より)

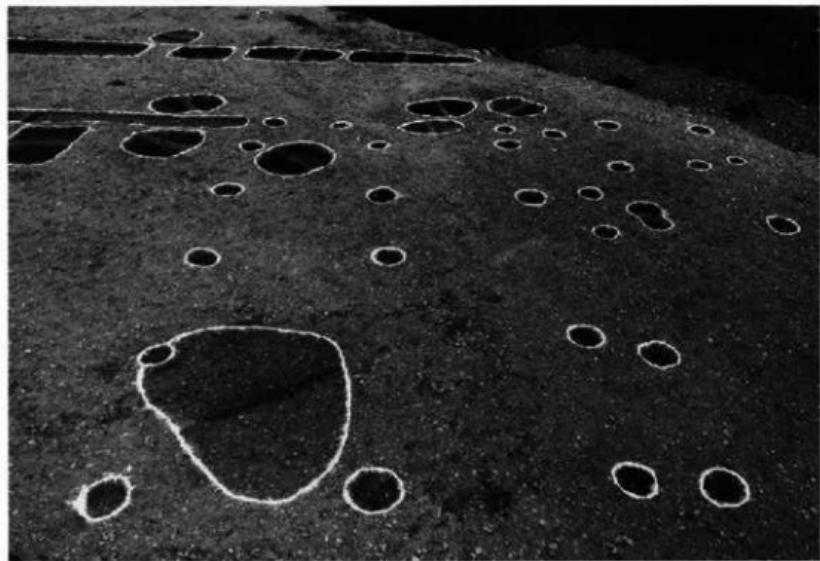
図版八 遺構



E-10区 SD13 (東より)



E-7区 SD14 (東より)



E-9区 SB01 (南より)



E-9区 SB01 (西より)



W-7区 堀状施設（北より）



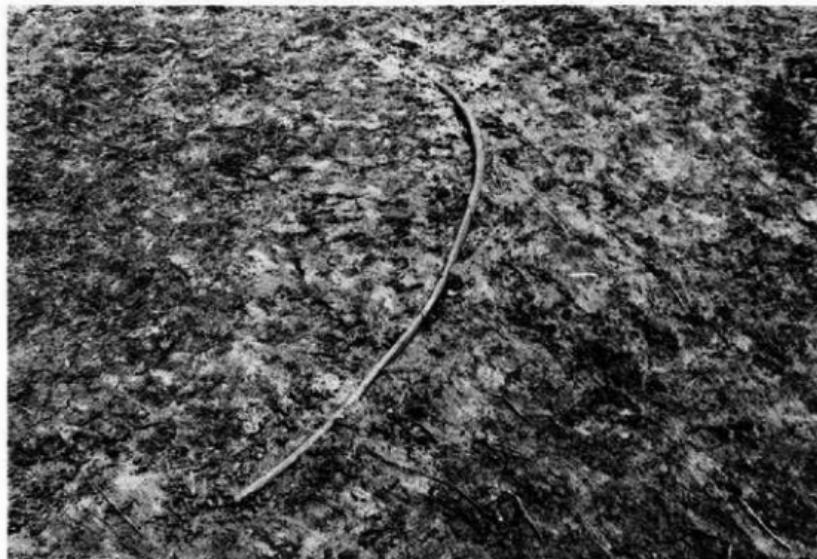
W-7区 堀状施設近景（北より）



E-3區 SD01遺物出土狀況



E-1區 SD01遺物出土狀況



E-2區 SD01遺物出土狀況



E-5區 SD04遺物出土狀況



W-7区 SD09遺物出土状況



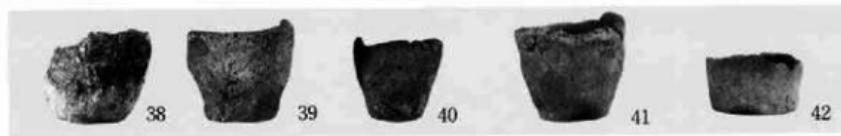
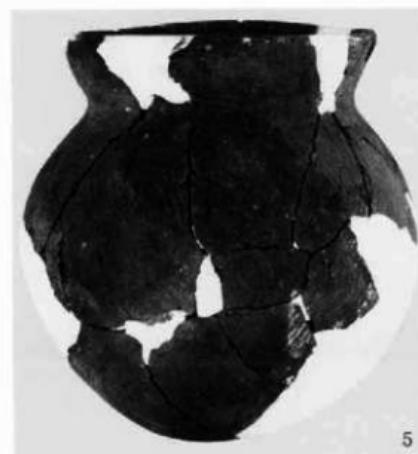
W-8区 SD12遺物出土状況



E-10区 SD13遺物出土状況

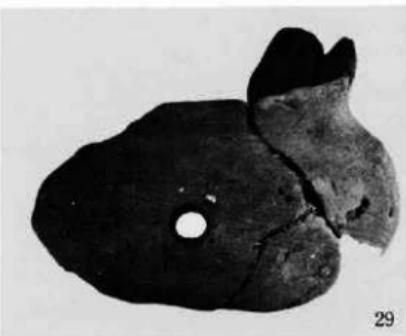


埋め戻し完了状況（南より）





22



29



27



30



28



37



32



48



49



35



53



44



45



55



58



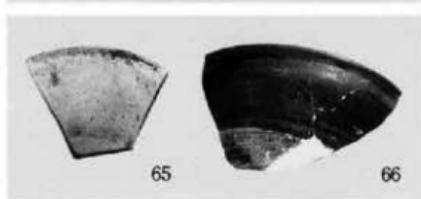
62



60



68

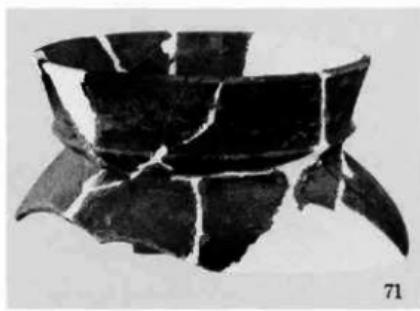


65

66



70

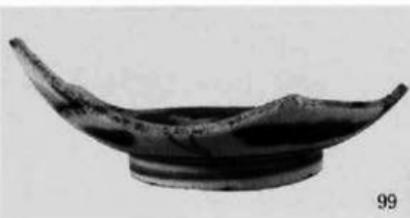




96



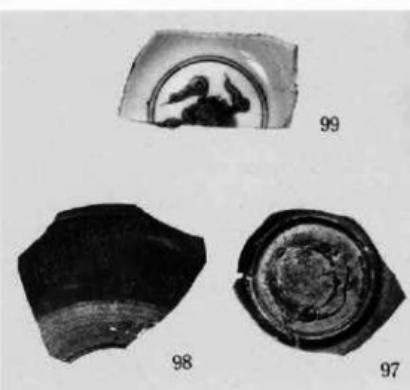
90



99



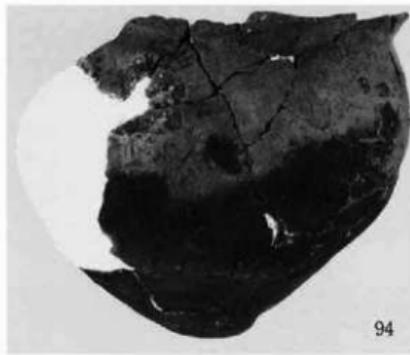
93



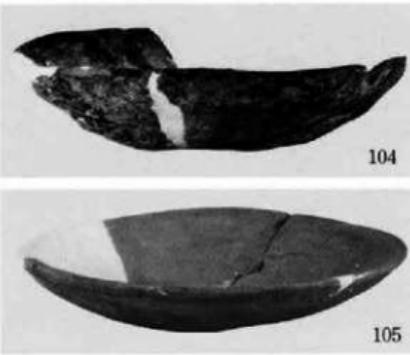
98



97



94



104

105

図版二 遺物



1



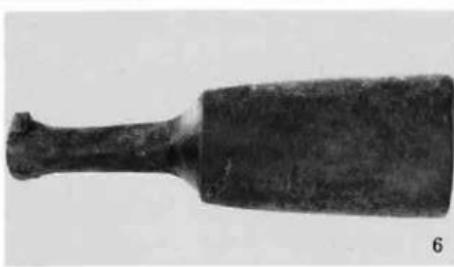
5



4



2



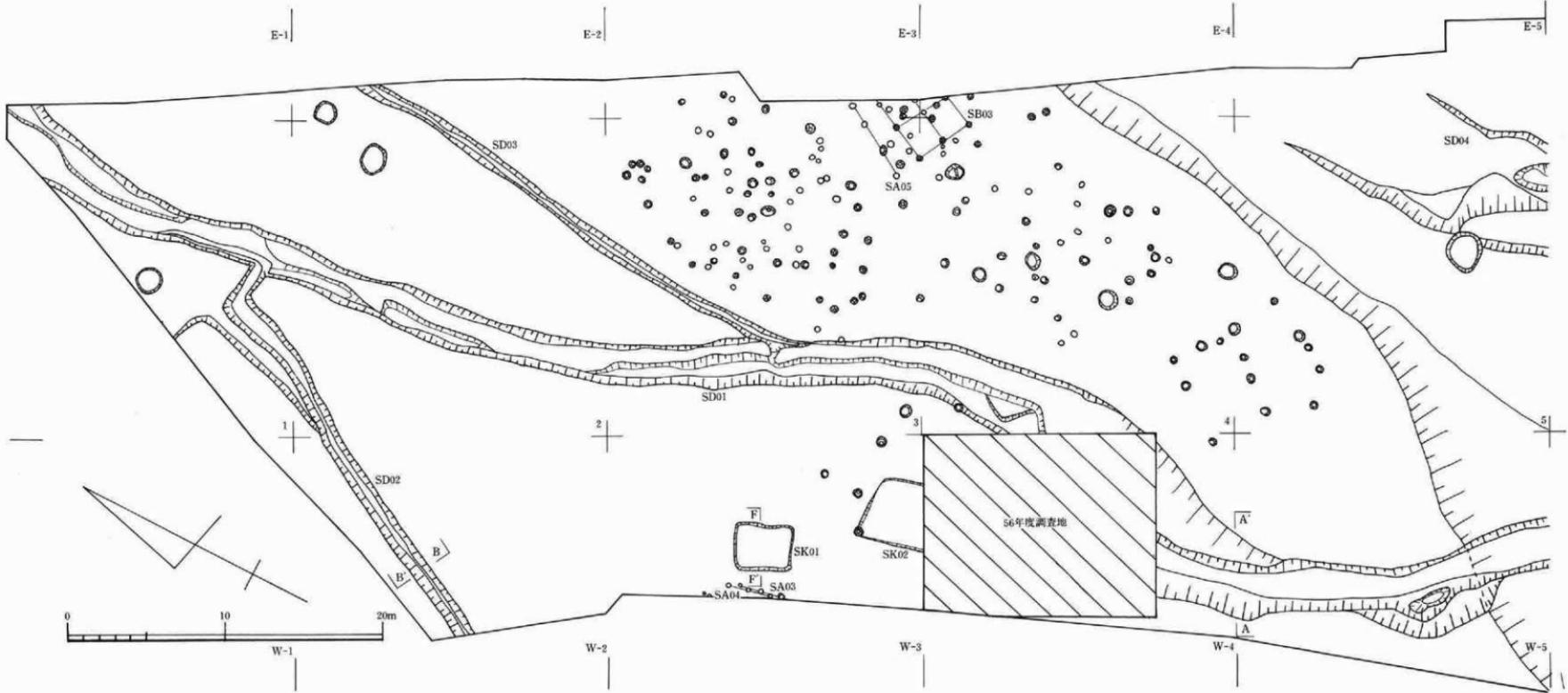
6

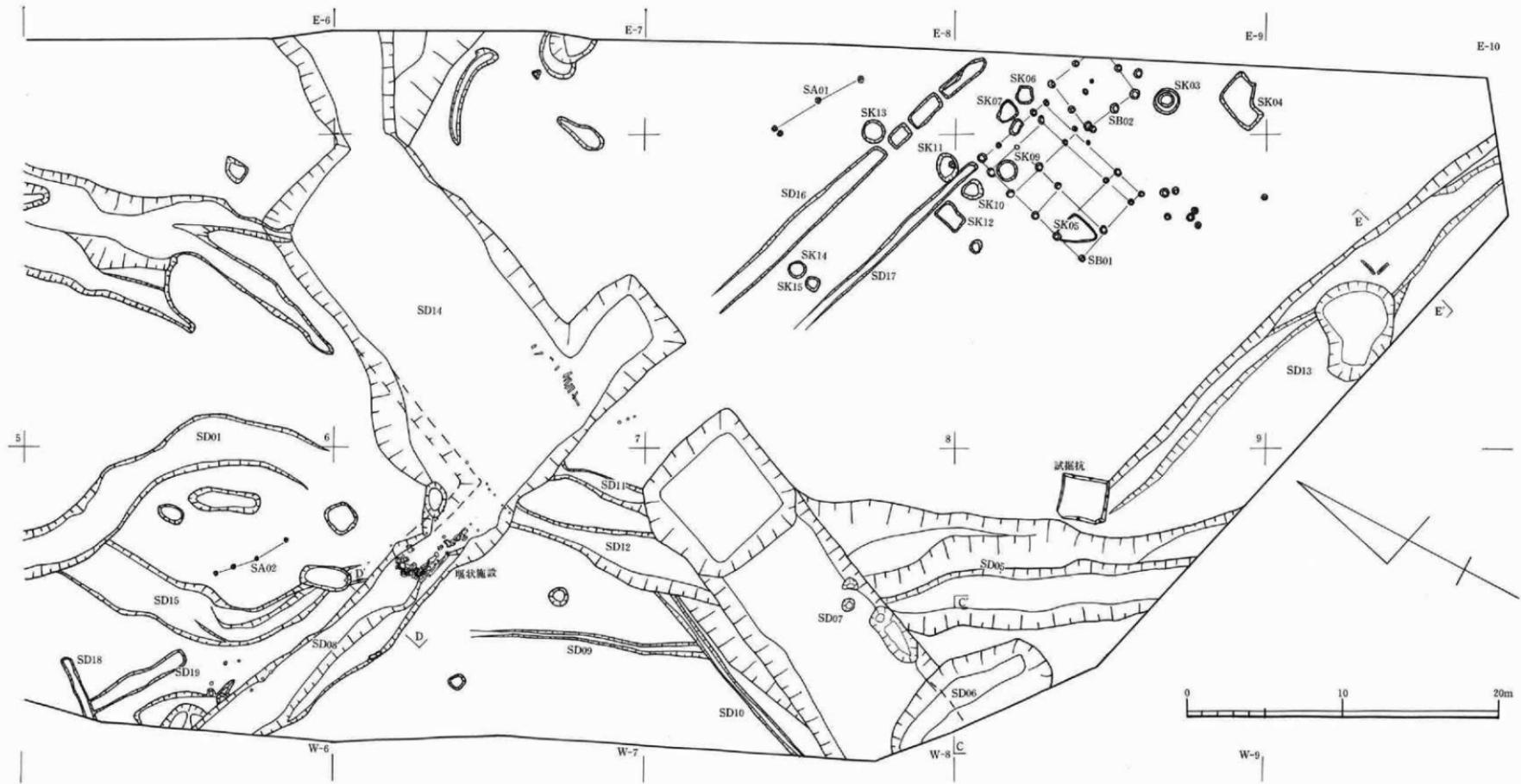


10

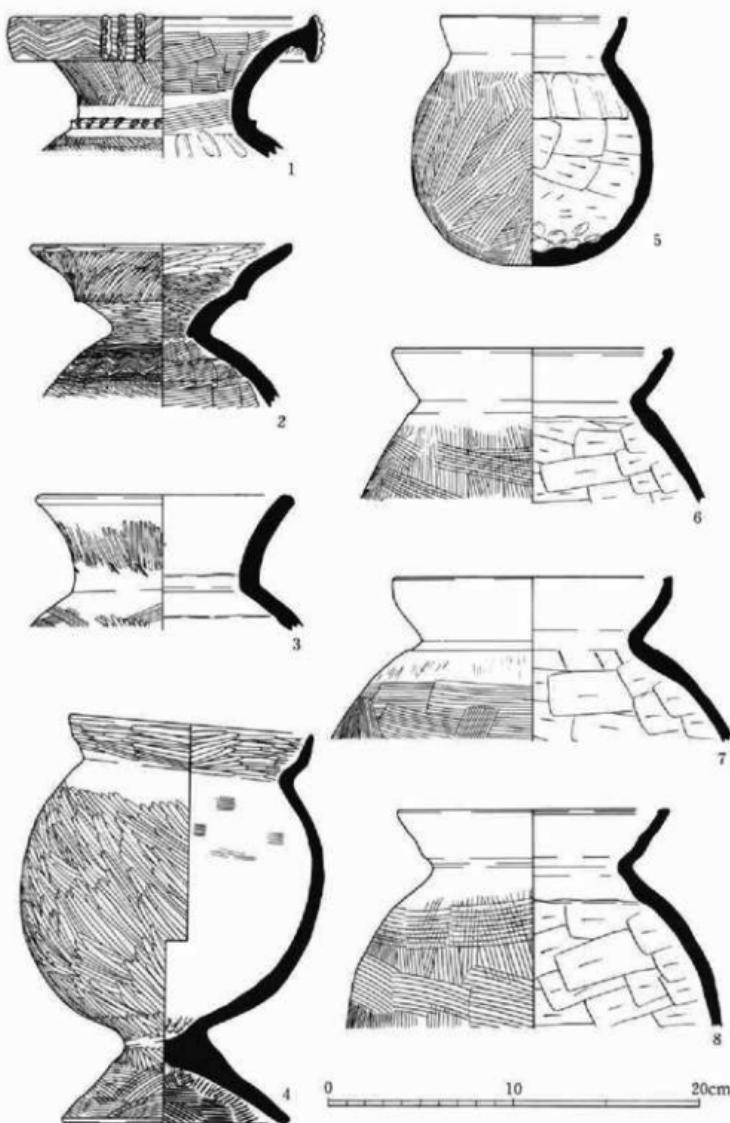


8



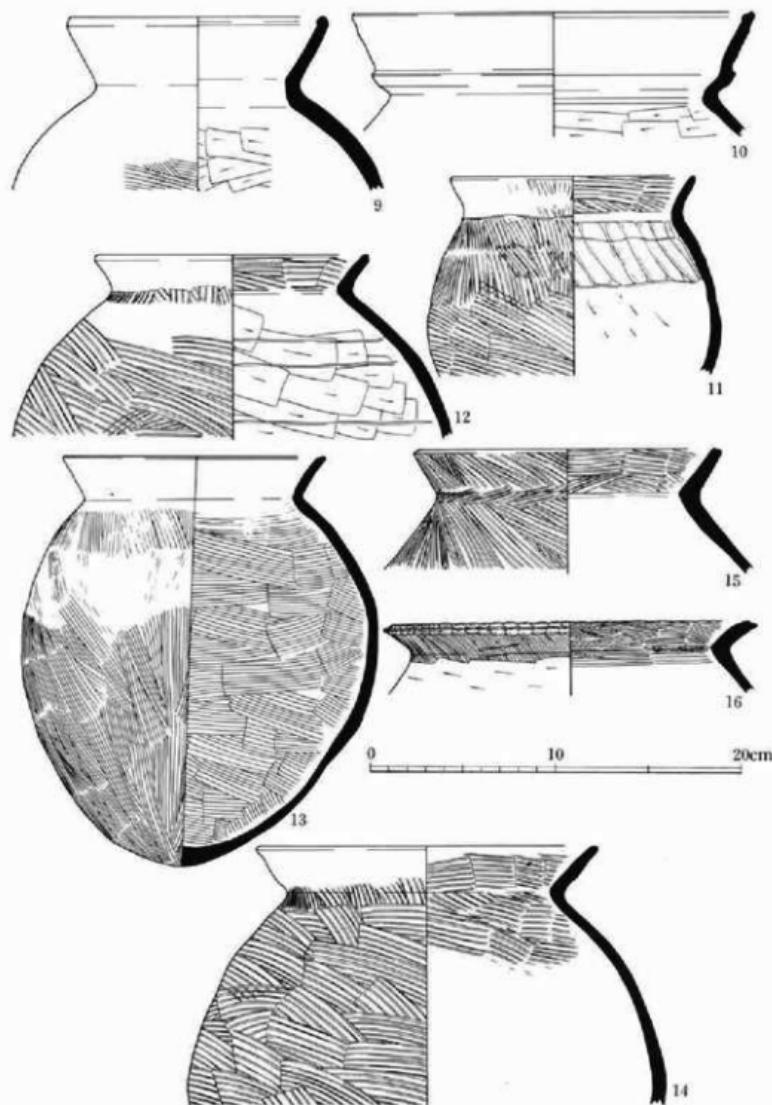


図版二十四 遺物実測図(1)



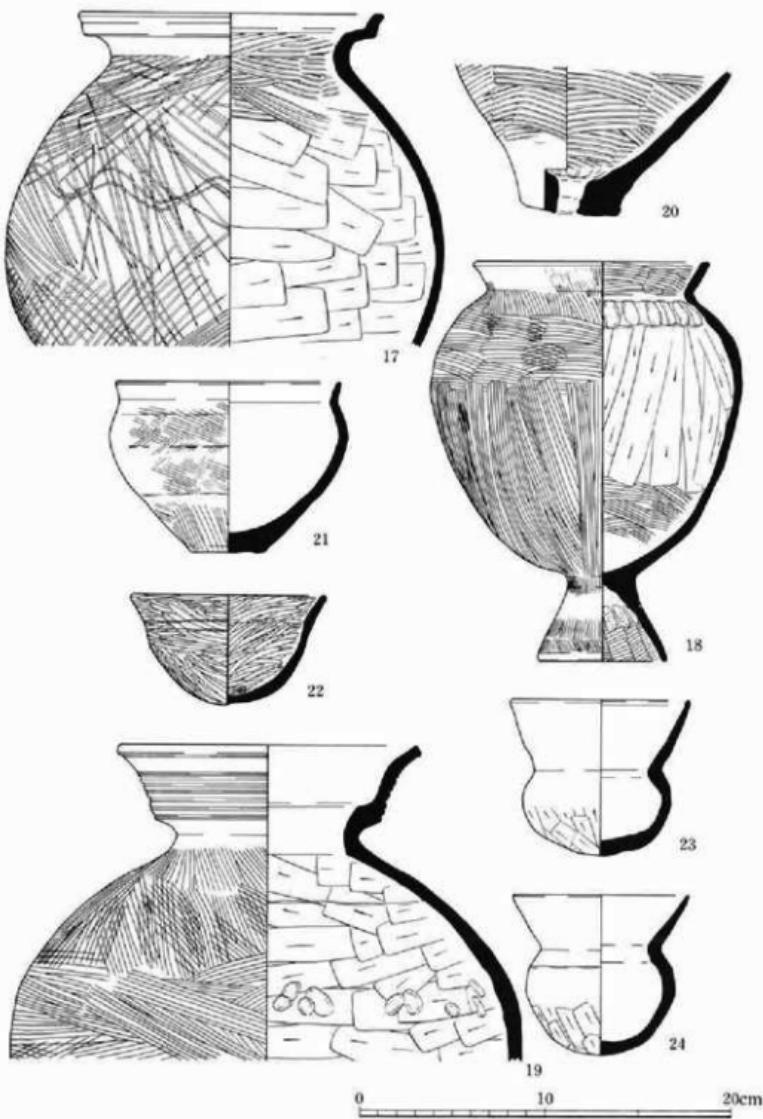
遺物実測図1) SD 01 (1~8)

図版二十五 遺物実測図(2)



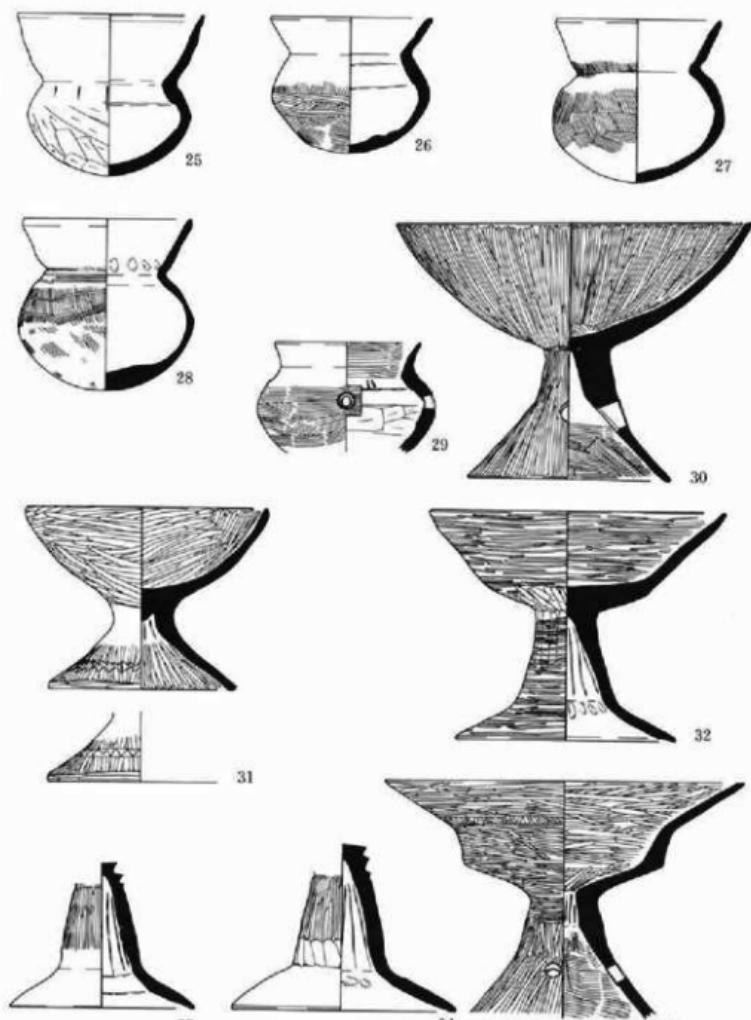
遺物実測図(2) SD 01 (9~16)

図版二十六 遺物実測図(3)



遺物実測図(3) SD 01 (17~24)

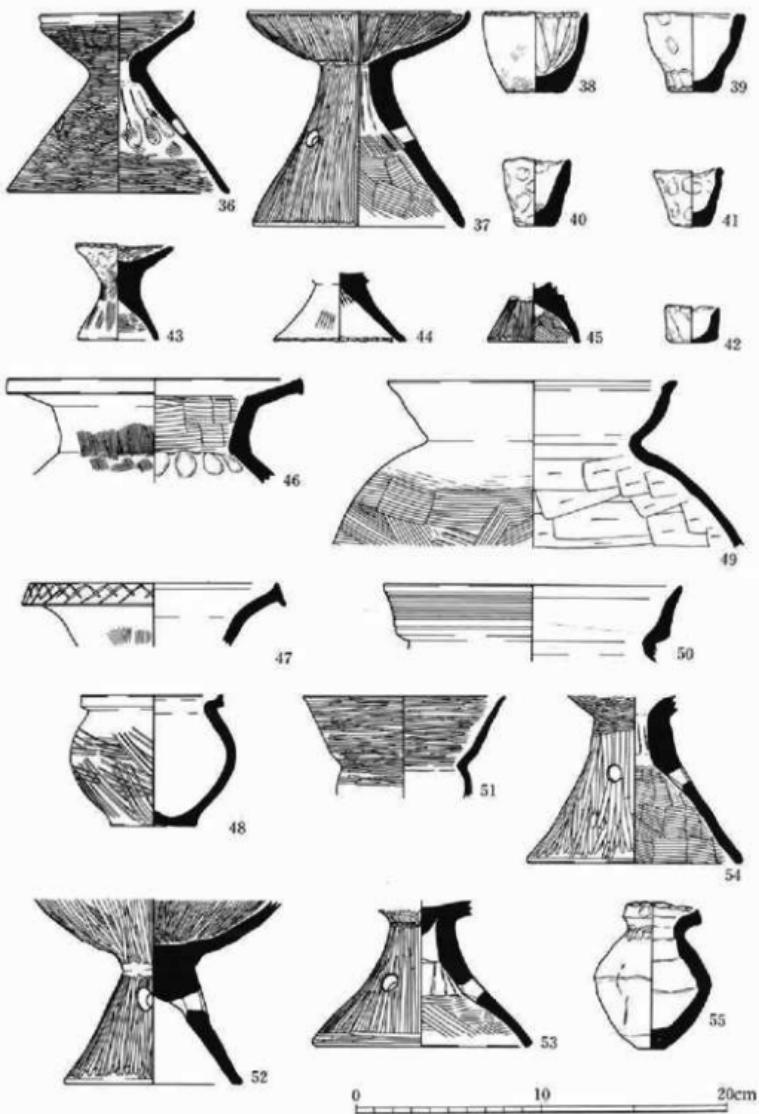
図版二十七 遺物実測図(4)



0 10 20cm

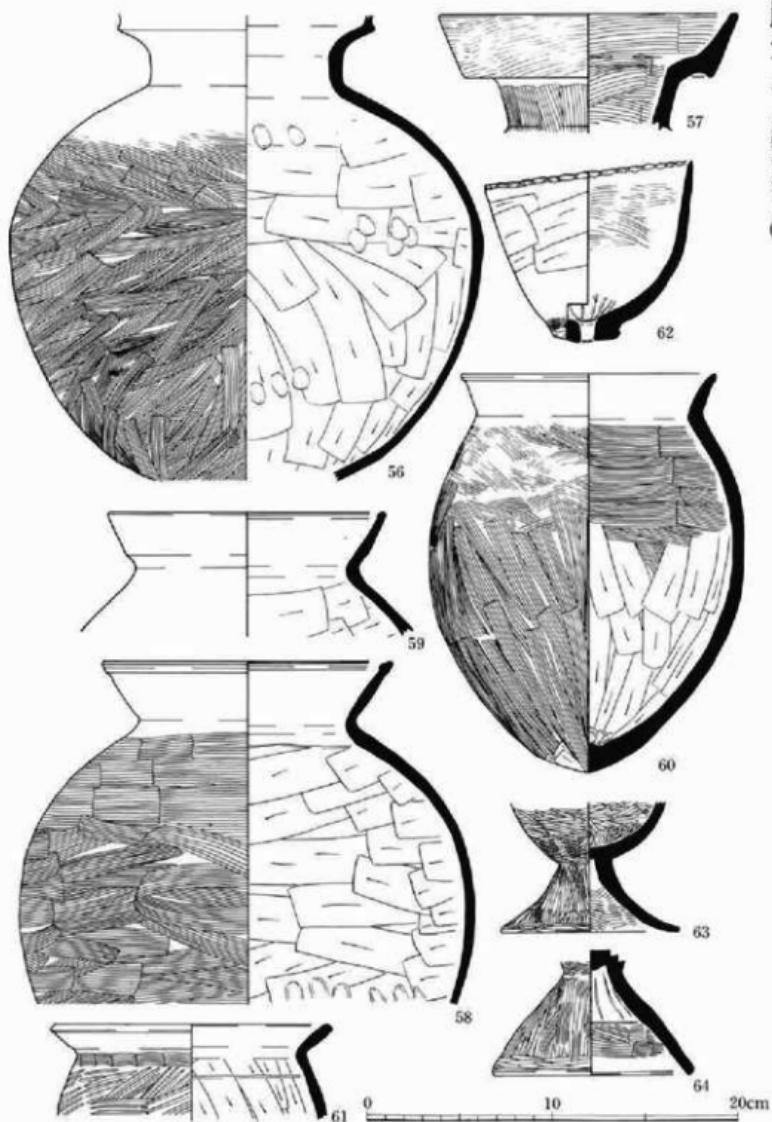
遺物実測図4) SD 01 (25~35)

図版二十八 遺物実測図(5)



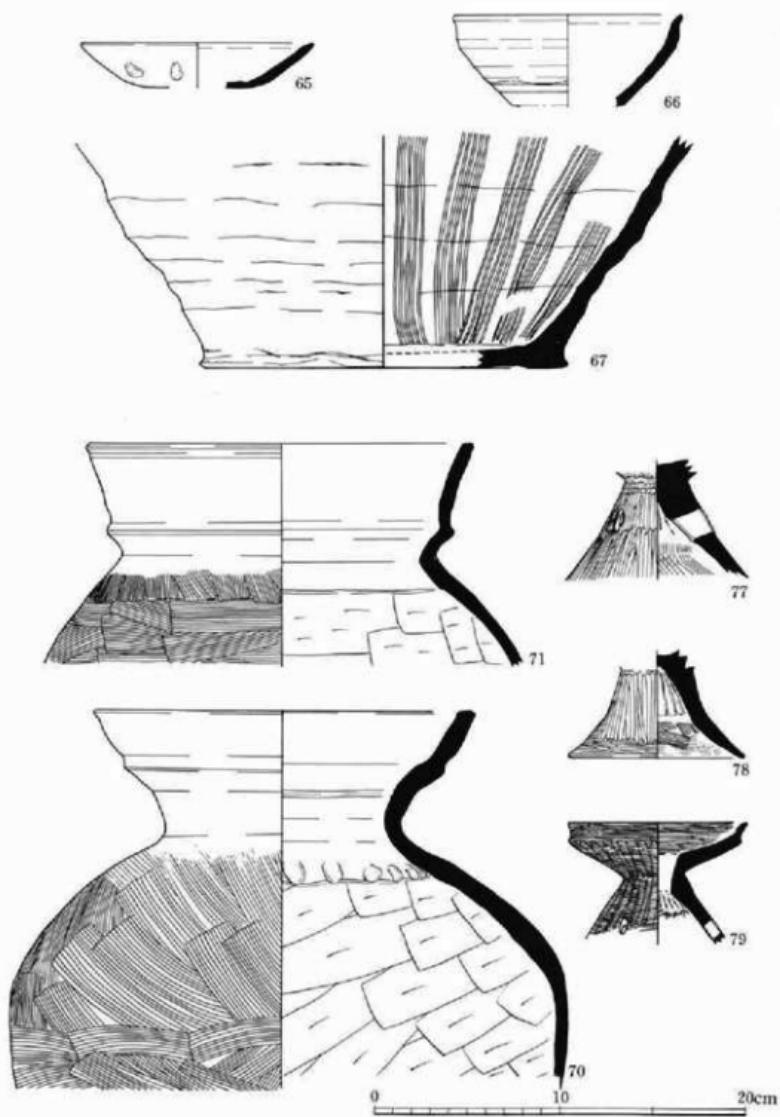
遺物実測図(5) S D 0 1 (36~45) · S D 0 4 (46~55)

図版二十九 遺物実測図(6)



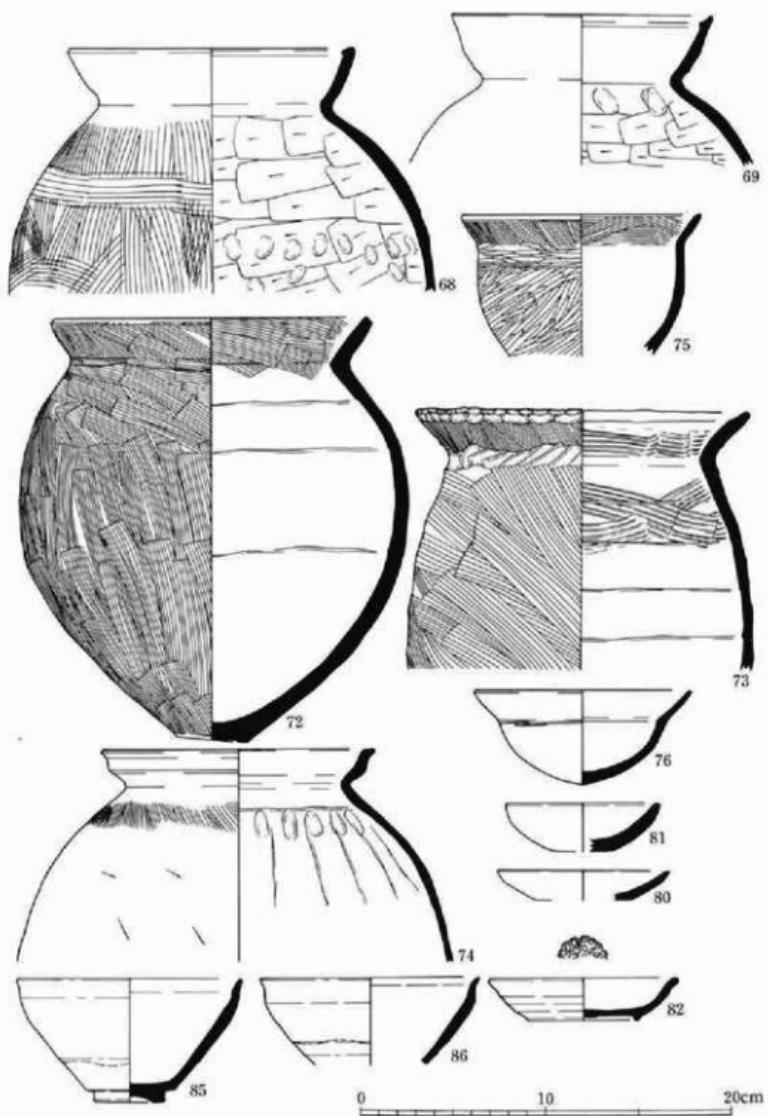
遺物実測図(6) SD 05 (56~64)

図版三十 遺物実測図(7)



遺物実測図(7) SD 08 (65~67) SD 12 (70, 71, 77~79)

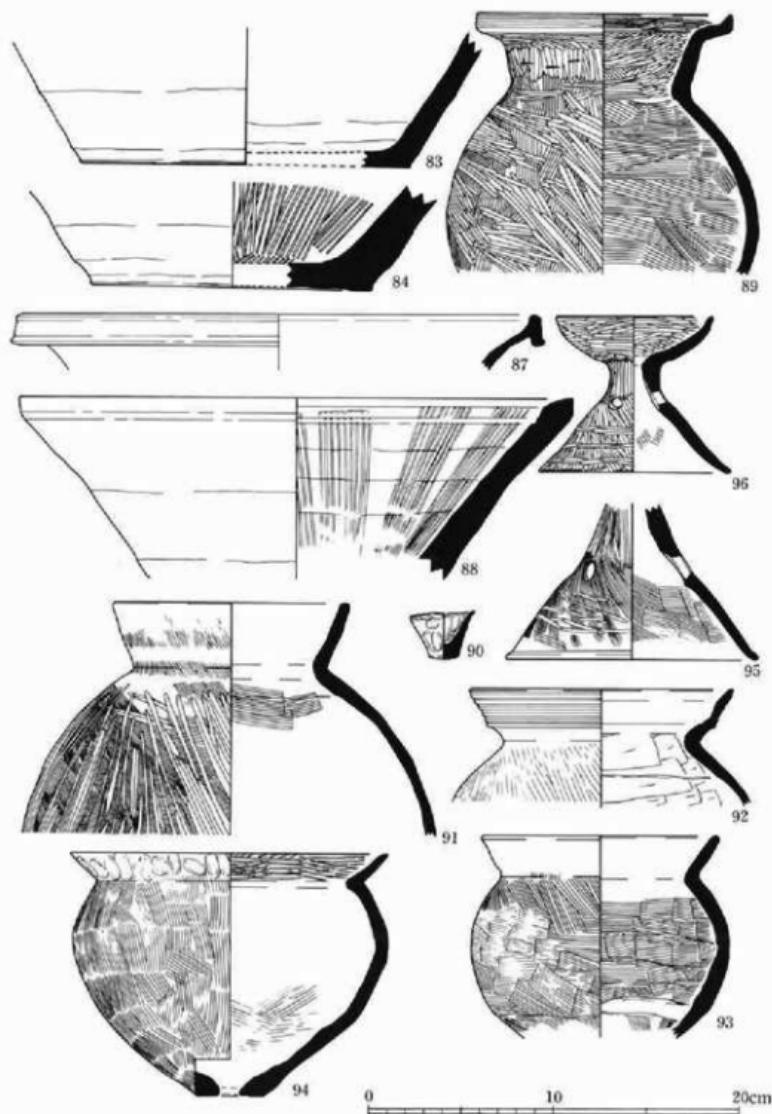
図版三十一 遺物実測図(8)



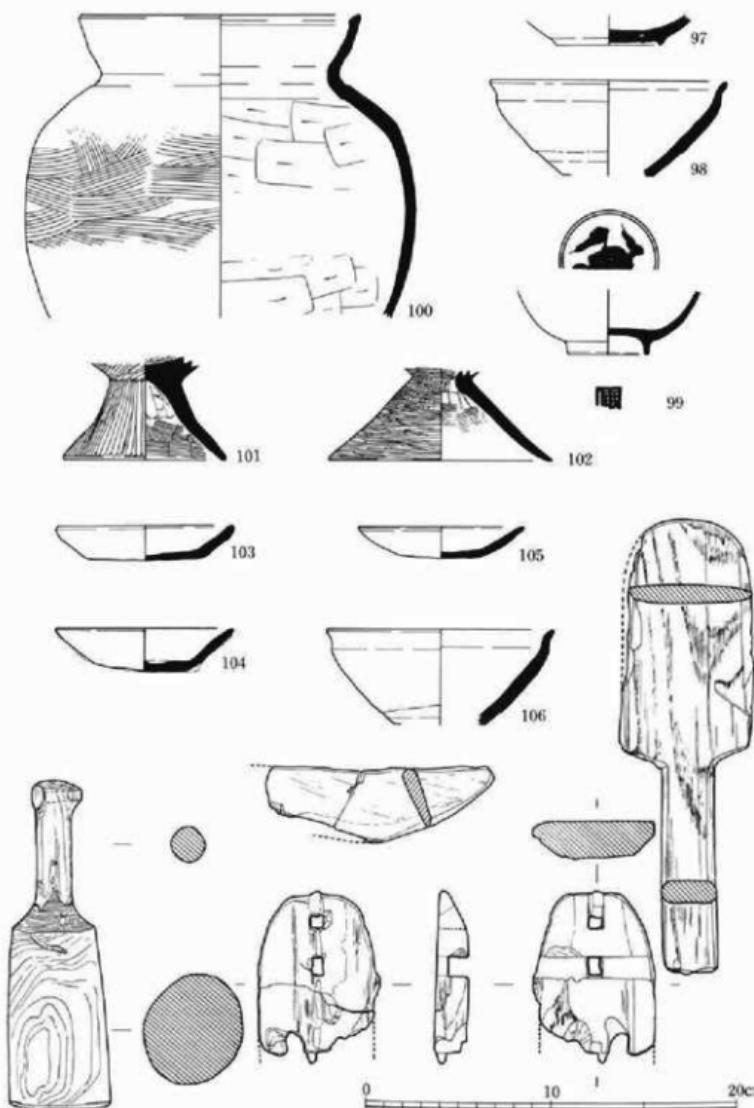
遺物実測図(8) SD 1 2 (68, 69, 72~76, 80, 81)

SD 1 3 (82) SD 1 4 (85, 86)

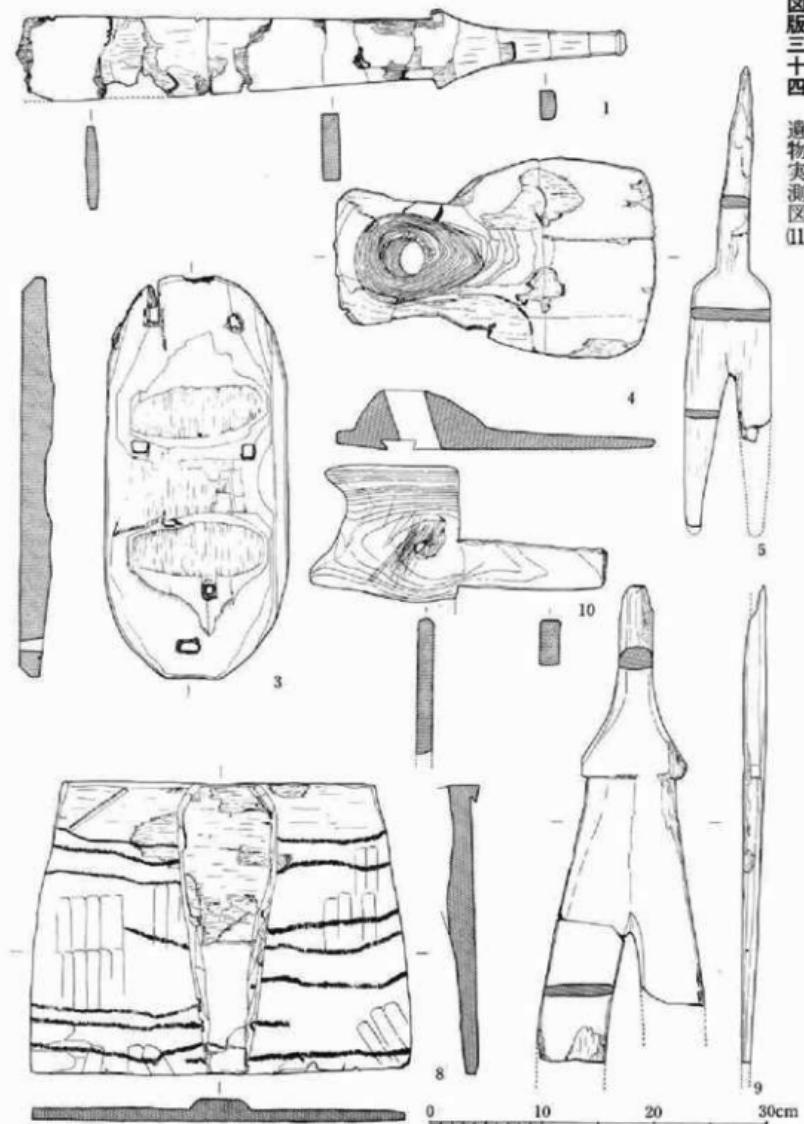
図版三十二 遺物実測図(9)



遺物実測図9) SD 13 (83, 84) SD 14 (87, 88) SD 15 (89)
SK 01 (90) SK 02 (92~95)



遺物実測図10 SK 04 (97-99) 茶褐色粘質礫土 (100-106)
木製品 SD 01(2) SD 05(6)



遺物実測図(II) SD 01 (1, 3) SD 04 (4, 5) SD 09(8)
SD 12(9) SD 13(10)

昭和61年3月

国道161号線バイパス関連遺跡調査概要 7

高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要

——古武城遺跡——

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大壹町 1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 (株) 龍朋舎